



眠狂四郎独步行

後編

柴田鍊三郎

新潮社版

眠狂四郎独歩行 後編

昭和三十七年三月一日 印刷
昭和三十七年三月五日 発行

定価 三一〇円

著者 柴田錬三郎

発行者 佐藤亮一

発行者 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(四)七一一(代表)
振替 東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお
取替えいたします。

目次

第二十六話	佳人の品	七
第二十七話	野ざらし	一九
第二十八話	右の腕	三
第二十九話	野猿記	四
第三十話	犬死	五
第三十一話	美女の墓	六
第三十二話	刺青妻	七

第三十三話	恐	怖	石	八三	
第三十四話	尼	僧	變	化	九三
第三十五話	因	果	店	一〇三	
第三十六話	秘	帖	祭	一一五	
第三十七話	鶴	と	少年	一二五	
第三十八話	浮	世	問	答	一三五
第三十九話	髑	髑	盃	一四五	
第四十話	女	心	記	一五五	
第四十一話	赤	い	蛇	一六五	

第四十二話	黒い鳥	一七五
第四十三話	凶運行	一八五
第四十四話	侍の子	一九五
第四十五話	不義妻	二〇五
第四十六話	乱れ半鐘	二一五
第四十七話	仇討異変	二二五
第四十八話	黒い劍士	二三七
第四十九話	追想記	二四七
第五十話	死戦	二五七

裝
幀
中
尾
進

眠狂四郎独歩行

後編

第二十六話 佳人の品

「何処へ参られますか？」

街道をふさいでいた数名の男たちが、眠狂四郎の近づくのを待って、胡散くさげな目つきで、行手をささげぎった。

八州取締出役が、村々を巡邏するにあたって、道案内をつとめる寄場の男たちであった。目明しに相当する役目を与えられた村役人である。

八州取締出役の命令によって、街道をふさいでいるのも、ものしい態度をかまえている。八州取締出役は、文化二年に、勘定奉行公事方の石川左近将監から、関東の代官たちに命令があつて設けられた役で、村々に無宿の悪党がいて良民の難儀となつてゐるのを調べて、取押えるのを目的としていた。抵抗すれば、討ちすててもよい権限を与えられてゐるので、その存在は、非常におそれられていた。

「足の向くままに——」

ふところ手のままに、こたえた言葉も不遜にひびいたし、姓名を問われて、

「眠狂四郎」

と名のつてみせれば、これを仮名と受取らない方が、どうかしている。

「御足労ながら、陣屋まで御同道ねがいます」

逃げれば取押えるぞ、という氣勢にかこまれて、狂四郎は、

「路銀の節約になるようだな」

と、笑つた。

今市の宿の入口に構えられた代官所は、十萬石以上の地面を支配するところだけあつて、宏壯であつた。

狂四郎が、入つた時には、すでに二十数名の疑わしい男女が、白州に坐らされてゐた。

狂四郎は、その中に、例の風魔一族の女——里女が交つてゐるのを見出して、

——縁がありすぎるようだ。

と、思つた。

里女は、そ知らぬふりをしてゐたが、こちらが入つて来るや、すぐに気づくだけの神経の持主であるだけに、その態度が、狂四郎の目には、不自然なものに映つた。

小柄だが、目つきの鋭い八州取締出役が、広縁上に、せかせかと出て来て、吟味の理由を、大声で、告げた。

大沢宿に、大沢御殿という屋敷がある。いま、ここに

は、去年逝去した白河楽翁の愛妾作江という女性が、住んでいる。

今晚、その屋敷に、盗賊が忍び入り、楽翁の遺品を盗み去った。それは、銀製の、鶴の巢ごもりの文鎮であるが、楽翁が將軍家輔佐となつた時、幼かつた將軍家より拝領した品であつた。

將軍家拝領品であるとともに、楽翁遺品である文鎮を、この近在の無宿者や破落戸がいかに無頼であつても、盗みとるわけがない。

盗みとる理由があつて、他國——おそらく、江戸からやつて来た者の仕業と推測される。

ここに集めた者たちは、孰れも、江戸から来たとおほしい。

よつて、搜索の網にかけた次第である。吟味がおわるまでは、神妙にしておいてもらいたい。

そう申渡しておいて、出役は、手代がききとつて列記した人名帳を受けとつた。

目を通すうちに、眉宇をひそめた。

そして、あわてて、白州に並んだ顔を見まわして、狂四郎へ、視線をとめた。

「眠狂四郎なる御仁は、お手前か？」

「左様——」

「まことならば、失礼いたしました。お手前のことは、すでに、ききおよんで居り申す」

出役は、狂四郎を除いて、全部の者のからだを検査するようになり、配下たちに命じた。

男たちは、禪ひとつにさせられた。

女は、里女をふくめて三人いたが、これは、きものの上から撫でまわされたのち、三尺幅の蓆を跨がせられた。もし、銀の文鎮を、女の秘処にかくして居れば、当然、股をひらけば、重いものだから、すべり落ちる、という、女の身体を検査する上での常套手段であつたが、よもや、そんなものを、そこにかくしている筈もないと知り乍らの、いわば、手代たちが目の愉しみにする役得を、行使したにすぎなかつた。

だが、これを眺めていた狂四郎の脳裡に、ひとつの直感が、ふつと掠めた。

蓆を跨ぎこして、もとの場所へもどろうとする里女に、何気ないふりで、歩み寄つた狂四郎は、

「わたしは、これから、盗まれた品を見つけて来る。：

；但し、これは、貴女が、ここから解き放されても、わたしを、どこかで待っていてくれると、約束してくれるならば、だ」

と、云つた。

里女は、にっと、白い歯をみせた。

「行っただいおいでなさいませ。わたくし、お待ち申上げて居ります」

狂四郎は、ゆっくりりと、広縁へ近づいた。

「八州殿に申上げる」

「なにか……？」

「鶴の巢ごもりの文鎮とやら、この眠狂四郎が、おさがしいたそう」

「お手前が……？」

「ここに集められた人たちは、なんの関係もない盗難事件と存ずる。これは、明言できる。すみやかに、釈放して頂けまいか」

「お手前が、責任をもって、さがし当てると云われるのか？」

「金打いたしてもよい」

狂四郎は、きっぱりと、云つてのけた。

「ふむ！」

出役は、じっと、狂四郎を凝視していたが、
「もし、とりもどすことが、叶わなかったならば、如何される？」

「このけがれ首でよければ、さし上げる」

「よろしい！」

決断力のある人物のようであった。大きく頷いて、
「明日暮六つまでにとりもどして頂こうか」
と、云った。

すると、狂四郎は、

「いや、一刻を与えられるだけで、充分と存ずる」

と、こたえた。

啞然とする出役や配下をしりめにかけて、狂四郎は、
踵をまわすと、門へ歩き出していった。

二

白河菜翁——松平定信の偉さは、執政となって、能く寛政の改革を断行したことにあるのは云うまでもないが、政治家として、その退き際の鮮やかさにあった、と狂四郎は観ていた。

天明七年六月、將軍家輔佐となつて七年間、その深い学問的な素養に基づく信念をもって、絶対的な権力を經濟政策にふるつた定信が、寛政五年春、海岸巡察の行旅の草鞋をぬぐとともに、突如として、公の老中及び輔佐職を退いたのは、世人を啞然とさせるに足りた。

もとより、定信の徹底した質素儉約の施政は、虚飾を悦ぶ大奥女流や奢侈になれた札差商人たちの不平を呼んではいたが、いまだこれが世論となつて、定信になげつ

けられる気配もなかったし、また、大奥の老女たちが、將軍家齊に讒した事実もなかった。

前代の権勢者田沼意次が、鬻ぐたる非難の渦の中で、罷免され、閉門を命ぜられ、所領悉くを公取されたのは、まったく天地の相違があった。

定信は、その権勢の頂上に在った時、自ら決意して、身をしりぞけたのである。

隠居して白河楽翁となった定信が、西丸老中となつて、次の時代の権勢者たるべく志した水野越前守忠邦にむかつて、左のような意味の手紙をおくつて来たのを、狂四郎は、武部仙十郎から読まされたことがある。

新政とか、改革とかいえば、はじめのうちこそ、前の時代の政策の種々の欠陥に不平をならした天下の人々は、有難味を感じる。

これまで公然と行われていた賄賂が止められ、その弊害が除かれた、といつて、渴した者が飲をなし易く、飢えた者は食をなし易くなつた、と評判する。

余のごとき、才も短く徳の薄い者でさえも、世間の噂では、聖人か賢人でもあるかのように、囁された。しかし、かかる評判は暫時にすぎない。

あまりに一方的に、白とほめすぎる人は、急に、掌をひるがえすように、こんどは、黒と誹る習性を

もっている。飢渴の時代が過ぎれば、個々の自由を、次々と欲するのが、人情の常である。

人間である余が、十年以上も権勢の地位に就いていれば、必ず、非難の声をあびせられるのは必然である。譬えれば、ある人が、正宗とか貞宗の名刀を蔵していると仮定する。その眞贋はともかくとして、之を蔵して置いて、天下に知らせておけば、いざ何か事があるといえ、その人は、その名刀を佩びて出るであらう、という信用を繋ぐ。

これが面白いところである。もしそうでなく、正宗や貞宗の名刀を、その人が、すこしも大切にせず、木や竹を切つたりして、刃を欠いたならば、威光も損じ、信用も落ちる、という次第である。

余が、改革事業をなしとげ、内閣の人物も揃つたところで、その職から退いたのは、正宗、貞宗の名刀のごとく、声価の落ちぬうちに、函に納められたかつたからに、ほかならぬ。

嘗て、江戸城溜間詰となつた頃、田沼意次を刺さんとして、ひそかに、懷中に短剣をひそめていた定信にして、はじめて、この決断がなし得たのである。

公職を去つたあとの定信は、悠々たる風流人であつた。前半生の政治活動で示された鋼鉄の意志はその影を

全くひそめ、一人の文学者として、才藻流露の日々を送った。白河町に築いた南湖園は、当代の名園となり、楽翁は、領民を集めて、湖上に舟をうかべて、ともに山水名月をたのしんだ。

心あてに見し夕顔の花散りて

尋ねぞ迷うたそがれの夜

と詠じた忘住所恋の一首によって、世人は、「たそがれの少将」とよんだが、いかにも、その名にふさわしい晩年の楽翁であった。

いつの頃か——そろそろ、古稀の峠にさしかかった頃、楽翁のそばに、影の形に添うように、一人の佳人が待すようになつてゐた。

七十二歳で、文人として目蓋をとじるまでの幾年間かを、世話したその佳人が、いま、大沢御殿に住んでゐる作江という女性であつた。まだ、三十になるかならぬかであつた。

狂四郎が、陣屋の馬を借りて、一気に駆けて、到着したのは、その大沢御殿であつた。

意図するところがあつて、表門からは入らず、音もなく、庭園へ忍び入つた。

召使う者は黜いのであろう、屋敷内は、ひっそりして、

人の気配も感じられなかつた。

刈込籬をこえて草庵露地に入った狂四郎は、あけはなたれた茶亭で、ひとり、点前をしてゐる清楚なすがたをみとめた。

はっと息をのむほど、美しい面差であつた。気品も匂う。未亡人のよそおいが、かえつて妖冶にさえ感じられる。

つましい氣質のひとであるうが、さらに孤愁を含んで、これは、男心をそらずにはいない容子である。

狂四郎は、わざと、声をかけず、亭前の葛石をつたつて、母屋へむかつて、歩いた。

あいては、こちらの影をみとめない筈はなかつたが、声をかけては来なかつた。

御殿と称されるほどの構造をもつた家であつた。貴賓を通す座敷が、設けてあつた。

そこへ、上つた狂四郎は、ゆっくりと、視線をまわした。無駄な調度はなく、それぞれの品が、吟味されて、その据り場所を得てゐた。

狂四郎は、脇床に据えられた竹筒の花生けに、目をとめた。泰山木の一枝が、住む人の人柄と姿を象徴するようになつて、大きな白い花を咲かせて、芳香をただよわせてゐた。

この花のいのちは、みじかい。今朝、剪きって活けておくと、昼にひらくが、しかし、明日は散ちっている。

狂四郎は、しずかに歩み寄ると、その一枝を、抜いた。

それから、筒の中へ、片手をさし入ると、ずしりと重い品を、把とり出した。

銀製の、鶴の巢ねこもりの文鎮であった。

狂四郎は、庭さきへ、頭をまわした。

そこに、いつの間にか、茶亭を出た作江がただいでいた。大きくひらいた眸子めに、怖れの色を滲しみせていたが、すらりと立ったすがたは、いかにも、もの静かであった。

「一服、所望もといたそうか」

狂四郎は、まず、そう云った。

三

炉のわきの点前てんぜんに就いて、作法正しく、茶をたてる作江を、狂四郎は、客の座から、じっと眺ながめていた。

その輪郭の美しい横顔には、覚悟の色が刷はかれていたように、みえた。

しかし、葉茶碗を、膝の前へさし出す手には、目に見えぬくらいほの微かな顔えがあった。

狂四郎は、無造作に、片手で把とりあげて、一息に飲みほしてから、

「貴女は、八州取締出役に、盗賊に何を盗み去られたか、と問われて、將軍家拝領の文鎮とこたえた後、それを、あの竹筒の中にかくした。そうですか？」

「……」

「盗賊は、昨夜、侵入して参ると、すぐに、貴女を当て落して縛とった。そして、寢室を捜した。きわめて容易に、目的の品を発見すると、貴女のいましめを解いて、立去った。……盗賊は、女であった。男ならば、貴女のような美しい女性を、そのままにして、立去るわけがない。犯とらされていれば、貴女も、このようにおちついた様子でいられる筈はずもない。……それにしても、今朝、貴女は、泰山木の一枝を剪きって、活ける気持の余裕があったとは思われぬ。にも拘とらず、活けた。盗まれたと称する品を、そこにかくすためであった。いやしくも、將軍家より楽翁公が拝領した品だ。かくすにしても、寢室や台所をえらぶわけにはいかぬ。貴賓座敷がえらばれる。気品のある、芳香をはなつ花でかくせば、ゆるされる、と思いついたのは、女心というものであろう」

「……」

「ところで、本当に盗まれた品は、何か？ 八州取締出

役を、わざわざ、呼びつけ乍ら、咄嗟に、それを正直に告げ得なかつたのは、何故か？……おこたえになれぬか？」

「……」

作江は、俯向いて、口をつくんだままであった。

「では、うかがうまい。そのかわりに、ほかに、ひとつ、うかがいたいことがある」

「……」

「貴女は、風魔一族という存在を、楽翁公から、きかさされたことはなかつたか？」

「……」

返辞はなかつたが、あきらかに知っている表情がうごいた。

「申上げておこう。盗賊は、風魔一族の女であった。風魔一族が、どうして、その品を欲したか、そこまでは、貴女もご存じではなからう」

「存じませぬ」

「しかし、その品は、いずれ、公儀の誰かに渡さねばならぬ、と楽翁公から遺言はあったと思うが……」

作江は、しばし、返辞をためらっていたが、もはや、かくしてもしかたがないと観念したらしく、

「關所物奉行朝比奈修理亮殿が参られて、五個の半辺蚶

を示されたならば、渡すようにとの、ご遺言がございました。……けれど、朝比奈殿は、先般、非業のご最期をとげられた、という報せがありましたゆえ、代って、受けとりに参られる御仁は、もうないかと、存じて居りました」

朝比奈修理亮が、遺言の代りに託した錦の小袋の中に、五個の小さな半辺蚶があったことを、狂四郎は、思い出した。

沈黙があつてから、狂四郎が、ふいに、ずばりと云つた。

「貴女は、いまだ、未通女ではないのか？」

作江は、打たれたような顔を擡げたが、すぐに、俯向いた。みるみる、羞恥の色が、頬に散つた。

「——そうか。白河楽翁は、この女に、伽をさせたが、妾とはしなかつたのだ。」

狂四郎は、やおら、立ち上ると、障子を閉めた。

それから、もとの座に就くと、

「礼儀をわきまえて、参上した男ではない。貴女のような女性を見せられると、無頼の欲情がそえられる。……」

貴女を、犯す！」

冷然として、そう云いはなった。